

共同研究【若手】● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究（2015-2017年度）

**なぜ、高等教育機関を対象とするのか**

これまで社会教育施設としての博物館・美術館が培ってきた機能や役割のなかには、文部科学省が掲げる「生涯学び続け、主体的に考える力を育成すること」（中央教育審議会 2012）を目指す大学の質的転換に向けた改革に有用な要素が多くある。

近年の日本の高等教育機関では、先述の改革実現のために大学教員の能力開発（Faculty Development、以下、FD）が推進されている。FDはかつて、授業方法等の改善を指す言葉として用いられていたが、現在ではそれが単なる授業改善にとどまらない概念であることが指摘されている（寺崎 2006）。また、将来の自己学習者としての学生を育てるためには、大学での研究活動を通して獲得される探求能力が重要であることも指摘されている（羽田 2014）。つまり、学生を学びの主体として扱い、大学教員と学生が一方向的な教授・学習の関係にあるのではなく、大学および教員の工夫により学生自らが能動的に学ぶ環境を提供することが強く求められている。このことは、昨今の博物館に求められる「市民とともに資料を『探求』し、知の楽しみを『分かち合う』博物館文化の創造」（文部科学省 2007）のあり方と重なっている。

**モノを装置として捉える視座**

ところで、本共同研究の企画をおこなうきっかけになった背景には、筆者が2012年4月から2015年3月までの3年間、国立民族学博物館（以下、民博）の機関研究員として博物館の教育に関わる業務に携わった経験が大きく影響している。とくに、民博の文化学習キット「みんぱっく」（「ソウルの子ども時間」）の教材開発や常設展示「沖縄のくらし」のリニューアルに携わるなかで物質文化に対する理解を深めただけでなく、人がモノと出会ったとき生まれる「対話」を主軸とする学びの可能性について考えるようになった。たとえば、筆者は、民博の展示場や大学の出前授業で大学生を相手にワークショップをおこなった際、モノに付与されたさまざまなエピソードについて語る機会があった。学生たちは、モノに触れてみたり、嗅いでみたりする過程で、さまざまな言葉を発したり、複雑な表情をみせたりした。彼らの発した言葉や表情から、彼らが何に反応しているのか、どこに注目しているかが明らかになり、筆者はモノ資料を介して大学生とさまざまな「対話」を経験した。しかし、この「対話」には筆者が思いもよらない発見があった。そこには、学生たちが



モノ資料を活用した授業風景（2015年6月25日、山形大学）。

モノを通して「他者」と向き合うなかで生じたコミュニケーションのすれ、齟齬が原因と推測されるような「対話」がみられた。とすれば、ハブニングとして捉えられる状況を含んでいるが、これは「対話」もしくは「非対話／ディスコミュニケーション」という二項対立図式におさまりきれない領域の部分があることを示唆している。な

ぜなら、学生たちは、自らの感性と身体を軸に考え、疑問をもったり、共感したりしながら、さまざまな次元で「対話」がなされていたからである。むしろ、学生たちのこうした「対話」こそが、自／他者理解に必要なプロセスであり、そうしたなかにインタラクティブな学びの醍醐味があるのではないだろうか。

現在、多くの大学教育で採用されている授業におけるコミュニケーション手段として、①直接の対話、②コミュニケーション・ペーパーなどの紙ベース、③ICTベースなどが挙げられる。「対話」という観点からみれば、モノは「対話」を生成させる、ある種の装置（device）として捉えることができる。教員と学生間のコミュニケーション手段のなかに、モノを加えることによって、より豊かな「対話」が生まれるのではないだろうか。また、学生の多様な興味関心のどこかに引っかかるような仕掛け作りをおこなうことで、よりインタラクティブな学びの可能性を探ることができないだろうか。

**博物館の新しいステークホルダーとしての高等教育機関**

本共同研究は、大学教員が博物館という「場」に足を運ぶ機会を提供し、モノ資料に触れ、それを活用した教育実践を、博物館関係者を交えて議論し、高等教育機関と博物館の連携による、よりインタラクティブな学びの可能性を探求する試



カリブーの毛皮でつくられた衣類をはじめて手にし、「モノ情報カード」を使って調べ学習をおこなう学生（2015年7月17日、山形大学）。

みでもある。その際、従来の博物館の認識のされ方について問いをなげかけ、「フォーラムとしてのミュージアム」の実現とその可能性を示しながら、多様性を肯定的に理解することの重要性を追求している民博から出発したいと考えた。

近年、民博では、参加・体験型の展示の整備やワークショップの実施、市民の主体的な活動の支援などといった、公共社会への双方向・多方向的な働きかけをおこなっている。また、2002年の新学習指導要領のなかで博物館と学校教育の連携が強調されたことから、博学連携の学習プログラムの企画・実施もより積極的におこなわれるようになった。昨今の博物館について、吉田憲司は「これまで一方的に収集・展示する装置であった博物館が、展示される側、そしてその展示をみる側、展示する側との間で、双方向・多方向的な交流を生み出す装置として活用されるようになった時代。そのような時代に、今われわれは立っているように思われる」（吉田 2013: 2）と述べ、これからの博物館は、ますますフォーラムとしての性格を強め、公共社会との結びつきが求められることを強調している。たとえば、民博では2008年度より、変動する世界の状況に対応できるように館全体の展示のリニューアルを開始した（野林 2014: 80）。その際、展示する側と展示される側の共同作業による積極的な展示の構築がなされている。しかしながら、フォーラム型博物館における協働性と連携性がおもに展示に集中してしまっているせいか、新しい博物館の未来像の議論は、とりわけ展示機能の可能性に偏ってしまっている（高倉 2014: 11）。

近年、博物館における資料の収集・保存・展示・研究・教育などの役割のなかでも、生涯学習時代を迎え、とくに幅広い年齢層と多様な知的関心に応えるための学習機会の提供や、学校教育や家庭教育との連携・協力が博物館に求められるようになってきている。こうした状況を踏まえると、フォーラム型博物館の実現のためには、新たなインタラクションの環境の整備も必要ではないだろうか。たとえば、国立歴史民俗博物館は「大学のための歴博利用ガイド—歴博でアクティブ・ラーニング」と銘打って、初等・中等教育だけでなく、高等教育機関を対象にした学習プログラムの提案を積極的に実施している。このような取り組みは、大学共同利用機関としての特性を活かしたインタラクションの実現の可能性を示している。

一方、民博と教育学の研究者が連携した物質文化の展示を用いた学びの研究や学習教材の開発をめぐる研究は、公教育における異文化理解のためのカリキュラム開発を中心としており、その多くが初等・中等教育を対象としたものだった。とくに、1998年の「総合的な学習の時間」の導入に伴い、児童・生徒の主体的な学びや調べ学習の場として博物館・美術館が活用されてきたことも影響しているだろう。ちなみに、日本における文化人類学と教育学の研究者による教育研究は、1970年代から少しずつ議論されるようになったが、そのほとんどが義務教育を中心とするカリキュラムに関するものにとどまっている。こうした状況も相まって、民博の資料を活用した研究は、高等教育、そして社会人教育などへ活用する可能性を狭めてきたのではないだろうか。

先に述べたように、近年の高等教育機関におけるFDの進展によって、大学教育は転換期を迎えている。博物館の新しいステークホルダーとして高等教育機関を対象にしたインタラ



番楽で使用する仮面を囲んで雑談する地域の人びとと学生たち（2015年7月12日、山形県最上郡真室川町）。

クションの環境を創造することは、新しいフォーラム型博物館の構築のみならず、大学教育における豊かな学びを提供することが可能になると考える。それは、学芸員をめざす学生だけでなく、将来、教員として教育現場に従事する予定の学生や企業に就職を希望する学生、さらにそこに関わる大学教員や地域社会の人びとの学びにも貢献できるだろう。

以上より、本共同研究では、文化人類学をはじめ博物館学、言語学、比較教育学、教育工学の分野を専門とする研究者の議論を通して、これまで積極的に検討されてこなかった博物館と高等教育機関が連携・協働した学びの可能性について明らかにすることをめざしていく。

#### 【参考文献】

- 高倉浩樹 2014 『展示する人類学—日本と異文化をつなぐ対話』 昭和堂。  
寺崎昌男 2006 『大学は歴史の思想で変わる—FD・評価・私学』 東信堂  
野林厚志 2014 『情報を体感する展示の方法論—国立民族学博物館の取り組み』 平井康之・藤智亮編 『知覚を刺激するミュージアム』 pp. 66-96 学芸出版社。  
羽田貴史 2014 『FDの反省と課題』 『現代の高等教育』 No. 559, IDE 大学協会。  
吉田憲司 2013 『文化の「肖像」—ネットワーク型ミュージオロジーの試み』 昭和堂。

#### 【参考サイト】

- 中央教育審議会 2012 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』 平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2016年3月1日閲覧)。  
文部科学省 2007 『新しい時代の博物館制度の在り方について』 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/014/toushin/07061901.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/toushin/07061901.pdf) (2016年3月1日閲覧)。

#### ごやじゅんこ

山形大学教育開発連携支援センター講師。専門は、教育人類学、比較教育学。民俗芸能を創造する場としての学校に着目しながら、朝鮮半島、南西諸島、近年は東北地方の学校で調査研究に従事している。論文に、「学校のなかの八重山芸能—人の移動と八重山芸能の成立過程に注目して」『国立歴史民俗博物館研究報告』第199集 2015年、「박물관 자료를 활용한 교육활동」 일본 국립민족학박물관 사례를 중심으로」 국립민속박물관 연례 『어린이와 박물관 연구』 (『博物館資料を活用した教育活動：日本国立民族学博物館の事例を中心に』 韓国国立民俗博物館編『子どもと博物館研究』) 2014。